

もしものび太の能力がACだったら

焰崩し

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作だとあやとりが特殊能力であるのび太。もしそれが射撃関係であるACだったらつていう趣味全開作品です

注意 一人称視点練習も兼ねた作品です。違和感があればアドバイスお願いします！また、こちらは趣味全開ですのでそれが許せる人のみ閲覧お願いします！（ちゃんとしたプロローグはこれから書きます）

見切り発車ですので続くかは正直怪しいです

目次

第一話	目覚めた鳥	1
第二話	旅立ちの鳥	9
第三話	辿り着いた鳥	15

## 第一話 目覚めた鳥

夢を見た。一つは『僕』がまだ『俺』だった時代。その時の僕はアーマードコアと呼ばれる二足歩行ロボットのパイロットをやっていた。最初はお金の為に戦った筈なのにいつしか僕は全てを焼き尽くす黒い鳥とか呼ばれて世界の敵見たくなっていた。その時の最期は…機体のエンジンが駄目になって爆発したんだっけ。まあ、過激だけど楽しい人生ではあった、かな。

もう一つの夢。そっちは僕が最近見たヒーロー、ミラクル銀河防衛隊になっていて悪人達を倒して友達の静香ちゃんを助け出した夢。まあ僕の手元には何故か黒い鳥って呼ばれてた時の武器があったんだけど…となんでだろうと思っていると意識が起き上がる様な、引つ張られる様な感覚がきた…

「…ふああ…」

欠伸しながら目を覚ます。またこの夢かあ…ここ最近僕はアーマードコアに関係する夢をよく見る。ミラクル銀河防衛隊の夢も同じくらいの時から見始めた。でもここ最近、この夢にも変化が出てきた。最初は悪人達を素手で倒してただけどアーマードコアの夢を見始めてからこの手に武器があった。

確か殺さないように、って思ってたパルスガンって呼ばれてる種類のUPL-09 FREMONTって言うのを二丁持ってたかな。更に見た事のないパワードスーツ…多分アーマードコアを模した物なんだろうけどそんなものも身につけてた。

僕は枕元に置いていたメガネを着けると布団から出る。とりあえず…顔洗いに行くかあ…そう思ってた僕は部屋の扉を開けて洗面所まで向かう。

洗面所で顔を適当に洗ってから朝ご飯を食べて部屋に戻る。いつもより遅く起きたからかママも多分ランチかなにかに行ってるみたいで居ないしドラえもんは…まあまたミイちゃんの所なのかな。

…暇だなあ…よし、みんなの所にも行こうかな！僕は家の鍵だけ持って外に出た。まず最初に向かったのは静香ちゃんの家。いつも

なら家に居るんだけど…居るかな？

「え、ジャイアンの所にいる？」

静香ちゃんの代わりに静香ちゃんのパパが言うにはジャイアンの家に遊びに行っているそうさ。そうか…じゃあ次はジャイアンの家に行こう！

「スネ夫の家に遊びに行ってる？」

今度もジャイアンが居ないから代わりにジャイアンのお母さんが出てきた。次はスネ夫の家に行こうか…でもこの流れ…

「裏山に遊びにいった？」

やっぱり…それじゃ今度は裏山に行こうかな…そう思った僕は裏山にむけて全力で走り出した。これから起こることなんて一切予想もせずに。

――数時間後――

「ドゥラゥえくもくん!!ジャイアン達がー!!」

「なにさのび太くん」

裏山に行ったあと、僕は走って家に帰って青いずんぐりむつくりでミラクル銀河防衛隊のお面をつけたロボットに泣きついた。このロボットこそ僕の親友、ドラえもん。未来からきた猫型ロボット（耳なしである）の一体で僕の未来を変えるために来た。何を言ってるのかと思うかも知れどこれが事実だからなんとも言えない。

「ドラえもん！僕達も映画を撮りたいよ！」

僕はドラえもんが裏山であった時のことを話した。裏山ではジャイアンと静香ちゃん、スネ夫の三人がミラクル銀河防衛隊の格好をして自分達で映画を撮っていた。それに混ぜて言ったら怪獣としてならって言われたから帰ってきた。

いくらなんでも怪獣は…それもなんか豚みたいな鼻の。なにあの猪八戒！ジャイアンがそういう格好したほうが似合うよ！ジャイアン…猪八戒…ウツアタマガ。

「ずるい…僕達も混ぜりに行こう！」

ドラえもんも乗り気になった。よし！これなら勝てる！いや、なにに勝つんだろう…主任？あの憎き主任?!いやもう勝ってるよ…何

やっぺんだろう。

そんなセルフツッコミをしながら裏山に向かっていた僕達だけどころ直後になって後悔した。それもかなり。

僕達はドラえもんの持つひみつ道具の一つ、着せ替えカメラを使ってミラクル銀河防衛隊の格好になっていた。

ここまでが酷かった：いきなり撮影中に殴りこんだと思っただけいきなり怪獣の格好にされてドラえもんのひみつ道具の映画監督ロボ、バーガー監督を使って映画を撮らされた。因みにタイトルはジャイアンvsのびゴン。

いやなんでき。

結局その実験と言う名の撮影はどこぞのボコられくまみたくにボコボコにされて終わった。どうでもいいけどボコられくまつて包帯だらけだけど可愛いよね。

そんでその実験と言うか：ひみつ道具を見せつけた上にちゃったかりドラえもんを隊長にするっていう条件を付けて撮影の準備をしていた。

と言ってもどうせ着せ替えカメラで僕達の服装を変えてグレードアップライトって言うひみつ道具でそれを強化するだけなんだけどもね。

その準備もあつという間に終わり、いざ撮影開始！目の前には緑色のでかい怪獣：カビゴジとでも言つところかな：どこぞのポケットなモンスターと緑色の怪獣から取ってきたけど。

「宇宙の平和は！」

「僕達ミラクル銀河防衛隊が守ってみせる！」

戦隊ものとかで言う名乗りをやって、カビゴジに立ち向かう。名乗りが終わると同時にカビゴジは火を吹いてきた。見せかけだから熱くはないけど撮影というのもあるから飛んで避ける。

因みにタケコプターは既に着けてるから問題なく飛べた。

「おーらーウルトラミラクルジャイアン：パーンチ！」

カウンターとしてジャイアンがカビゴジを殴り飛ばす。あれだけでかいと避けられる訳もなく簡単に飛ばされた。ざつと数十メートル

ルは。いやいやおかしいでしょう…

このスーツ、その人の性格とかから合った能力を強化するって効果がミラクル銀河防衛隊の中ではあったけど…多分それでジャイアン自慢の力持ちが強くなってるのか…

「アクアビーム!」

「ドリルパンチ!」

続けて立ち上がった怪獣に向かっていくのは静香ちゃんとスネ夫。静香ちゃんは腕から水のような物を高圧洗浄機のように発射しながら、スネ夫は腕からドリルを生やしてさっきのジャイアンみたいに突撃していった。静香ちゃんのはビームっていうより水圧カッターじゃ…多分お風呂好きの影響かな…

スネ夫は…なんだろう…多分プラモ作りとかの才能豊かな…腕からドリル…どつかの胸に顔のついてるロボットかな(すつとぼけ)

「ドラえもんパン…あれえ?!」

そしてドラえもん。ドラえもんもさっきまでと同じでパンチをしようとしたんだろう…何故か当たる寸前で逆さになって頭突きしてたけど。多分石頭が強くなったのかな…ていうかみんなパンチ好きすぎでしょ…

「のび太今だ!」

ジャイアンが僕に合図を送る。よし!便乗してパンチで行くしかないでしょ!そう思った僕はタケコプターの推力を上げてジャイアン達と同じく突撃してく。

しかし、ここで違和感が来た。急に頭が冷えていく感覚だ。これはつい最近夢で感じた感覚。いわゆる前世、『僕』が『俺』だった時代に良くなっていた感覚だ。僕は戦いになると極端に頭が冷えていき、常に冷静になっていた。

一時期一緒に仕事をしていた人が言ってたっけ。普通に話してるど温厚なのに戦闘が始まると人が変わったかのように冷えて鋭いナイフみたいになるって。多分今もそうなってんだろうな…

視界に入ったジャイアン達がこつちを怯えた目で見てる。更にはカビゴジも何処か化物を見るような目でこつちを見ている。そんな

に変わるのか…といふかなんでカビゴジも…まあいいや

「ここですら終わらせるよ…！」

僕は全力で右腕を引き絞る。それと同時に身体が何かに包まれていく感覚が急に来た。冷たい何かに包まれていく感覚。それと同時に何処か懐かしさも感じた。そして目の前に色んな情報が表示された。空中ディスプレイで視界が埋め尽くされると赤い警告のウインドウが表示された。

そして急激に右腕が重くなる。何だろうと思っただが右腕から唸るその音に聞き覚えがあつた為そつちに視線を向ける必要は無かつた。この複数の何かが動く、何かの悲鳴にも聞こえるモーター音。空気を引き裂く音。右腕に感じる重さ。

感覚こそ違えどそれに覚えはあつた。だからこのまま突っ込む！

「…さよならだ！」

その武器の名前は超<sup>グ</sup>大型<sup>ライ</sup>接近<sup>ド</sup>攻撃<sup>ブ</sup>武装<sup>レード</sup>

かつてACに搭載されていた規格外としか言えない武器。それによつて穿かれたカビゴジには大きい穴。普通に考えればこれだけでも倒れる。でも俺にしては珍しかった。いや、久しぶりの戦いだから何処かで楽しんでいるのか…

カビゴジの腹を通り抜けた俺は一旦着地し、右腕のグラインドブレードに意識を向けて強制的に装備を外す。

そして次に思い浮かべるのはバトルライフルと呼ばれた武装、KO—2H4／PODENKAとKO—2H6／STERKOZAの二丁だ。

それを両腕で構え、頭部、腕、足と弾丸を撃ち込んでいく。バトルライフルの性質上から撃ち込まれた所が爆発を起こしていく。引き金を引くたびに鳴り響く銃声。薬莖が排出され、落ちていく音。懐かしい硝煙の香り。それらは俺の心をより震わせ、夢中にさせた。

やがて弾切れを起こした二丁はカチツという音と共に弾を打ち出すのを辞めた。それでもカビゴジは立ち続けていた。



「ふうん…これに耐えるんだ…じゃあこれならどうだ…」

両腕のバトルライフルを消し、今度は背中の方にある武装を思い浮かべる。すると今度は思いリユックを背負う様な感覚が伝わり、大きなユニットが装備された。それを確認すると今度は頭の中でそのユニットに指示を送った。

「よし…この感覚だ…」

目の前にグラインドブレードを使った時と同じく赤い警告が出現する。そして背中の中のユニットが変形していく。騒音をたて、背中のユニットから伸びた三脚のついた銃身が右腕に装備され、背中のユニットの筒が開き、青白い光を放つ。

その武器の名は主任砲<sup>ヒュージキャノン</sup>

かつて俺を苦しめ、俺を救った規格外の武器の一つ。

俺は右腕の銃身の三脚を立て、姿勢を維持する。目の前に標準を合わせる為の照準モニターを表示させ、狙いを合わせる。大丈夫だ。俺の時も僕のとときも、射的は得意なのだから…

「これなら殺しきれる…さよならだ！」

照準を合わせ、トリガーを引く。すると青白い光と共に弾丸が放たれ、吸い込まれるかのようにカビゴジを撃ち抜いた。

撃ち抜かれたカビゴジは悲鳴を上げることなく文字通り消し炭になつて消えていく。これが俺が何もかもを焼き捨てる黒い鳥と呼ばれる事となつた力。

「す、すげえ…」

「かつこいい…」

「おー…」

「のび太さん…」

先程の恐怖心はどこへやら。四人は僕の方をみて呆然としていた。まあしようがないかな…そう思いながら再び背中の

戦いが終わって俺としての意識がなくなった僕は改めて自分の状況を確認する。ミラクル銀河防衛隊の隊服の上から纏つてると思うACみたいな鎧。これは夢でよく見てたから問題ない…ないのかな？

そしてACの武器を展開して戦ったこと。これについても俺の時の感覚で戦えたから問題ない…と思う。でもあの雰囲気についてはちよつとまずいのかな…怖がらせちゃったし。

なんて説明しようかなあなんて考えながらと思いつながら皆のところに向かう。怖がられたらどうしようかなあ…

「のび太！なんだその鎧！ロボットみたいでかっこいいじゃねえか！」

「そうぞー！のび太の癖に！羨ましいな…ちよつと怖かったけど」  
「のび太くんだけなんでそんなかっこいいのさ！ちよつと怖かったけど！」

あ、あれ？思ってた反応と違う…てかやつぱ。怖かったか…

「あはは…多分特技の射撃が強くなったんじゃないかな…」

なんとか誤魔化しながら鎧の方に意識を向けて装備を外そうとした僕だったけどリーダーに僕達以外の反応があった事に気づく。なんだろうこの反応…そんな事を考えているとその反応の方向から拍手が聞こえ宇宙服をきた人が二人こつちに向かつて歩いてきた…なんか知らないけど嫌な予感が…

「お見事でした！流石ヒーローですね！」

そのうちの片方の人物が拍手止めずに何処か高揚とした様子で声をかけてくる。うーん…悪意は感じないし、多分ヒーローとかが好きなのかな…

「やつぱ凄いな…腕は鈍ってないみたいだねえ…流石は黒い鳥って呼ばれた男かな？」

この声…もしかして！僕はその声に聞き覚えがあり、直ぐに先程使用したバトルライフル二丁を再展開する。無論弾はリロード済みだ。その行動に驚いたドラえもんに向かうの人の一人はどういう訳か分からず呆然としている。

ライフルを向けられた本人は涼し気な様子で高笑いをしながらこちらを見ている。相変わらずだ。

「いや～やつぱり気づいちゃったかな？ひっそりだねえー！元気にしてた？」

「相変わらずのふざけっぷりだな…主任」

「これくらいじゃないと俺じゃないでしょ？キャロリンも向こうで元気にしてるよ？いやーほんと、ここに来てよかったよかった！」

そう言いながら主任は右手を差し出しながらこちらに向かつて歩いてくる。それと同時に主任の身体は嘗ての主任の機体、ハングドマンへと姿を変えていた。それにドラえもん達は再び驚きを隠せずにいる。

まあこいつはよく分からないやつだが意味の無いことはしない。悪意も特に感じないし…まあ信用しても問題ないだろう。

そう思い、こちらも左手を差し出して握手を交わす。はあ…あとが面倒くさくなりそうだ

## 第二話 旅立ちの鳥

あの後僕らは主任ともう一人、アロンの案内によって宇宙船に乗ってポツクル星という所に向かっていった。主任もアロンのようにネズミのような見た目になっていて暫く爆笑していたのはついでの話だ。

その途中で僕らは情報を交換していた。特に僕と主任は僕らが本来いたアーマードコアが存在していた世界、そこで僕が死んだあとの話を聞いていた。

主任はどうやらその世界での神の使いのようなAI的な存在であつたからその後の歴史についても知っており、物のついでに聞いてみたのだ。

主任から聞いた話によると俺、つまり黒い鳥の後継者となる者が現れ、再び世界をかき乱したらしい。死神部隊とか呼ばれる厨二病部隊やその頭である主任以上に頭のイカれた財団、Jという男とそいつが駆るN-WGIX/Vという俺が生まれる前に世界を枯れさせたコジマ粒子を使用した機体、ホワイトグリントにかなり似た機体との激戦などを映像で見ていた。

「ど〜う？元祖黒い鳥としては」

「ノーコメント、というより前から思ってたんだけど黒い鳥ってどこから来たんだよ…」

正直いつの間にかそんな異名付けられてたから何とも言えないよね。ただ自分がやりたいように動いてたらそうなっちゃったんだから。てか何黒い鳥の昔話つて。別に全てを焼き尽くすとかそんな事できないからね？コジマ粒子使ってるわけでも無ければ僕が所有してたOWでそんな事出来そうなの…あつたわ。それも複数形で

「まあ君のエンブレムから来てるからねえ…ところでさつきから口調が不安定みたいだねえ？」

「うるせえお前といると調子狂うんだよ」

そう。主任と話していると俺と僕の人格が混じって変に口調が安定しない。まあ幸いなのはどこぞのマイティーブラザーズみたいに魂？意思？が2つあるわけではないって事だよ。いや僕が俺と分裂

して二人になったら戦力はだいぶエグいことになるよね。知ってる人からしたら黒い鳥二体分に主任でしょ？

「…できないかなあ」

「いや急にどうしちやったのかなあ？残念ながらハングドマンは赤くならないし剣ももってないよっ」

「違うそうじゃない。声は似てるけどあそこまで外道じゃないでしょ貴方は」

「いやー、やっぱり君と話していると飽きないねえ」

はあ…主任の相手面倒くさいなあ…ドラえもん達とかなんか温かい目でこつち見てるし…というか

「ねえアロン？そろそろそつちの事情とか聞きたいんだけど…いいかな？」

「あ、そうでした。ではそろそろ説明させて頂きますね」

アロン君それでいいの…？いやまあ主任と調子こいて話してた僕も悪いんだけどね？

「それではこれから僕達の星の現状についてお話します」

どうやらアロン君達の種族の住む星、ポツクル星が開拓業者としてやって来た宇宙海賊の連中に滅ぼされそうになってるらしい。ポツクル星をエネルギー砲のエネルギーに使ってポツクル星を照らしてるダイヤモンドの太陽を破壊、それを回収するらしい。

そんなことされれば太陽が無くなるわけだから星は氷漬けになって氷の丸い球体の出来上がりになる。

それを知ったアロン君はなんとかしようとしたけど宇宙海賊のメンバーに見つかって脱出しようとした所を主任に助けられ、そのまま一緒に行動してるみたいだ。

「どうか皆さんの、ヒーローの力を貸してください！」

アロン君のお願いに対し、ジャイアンやスネ夫はどうやら撮影の続きだと思って引き受けてるみたいだけど…バーガー監督や主任の反応を見るに…

「おい、主任」

「ん？何かなあルーキー」

主任に小声で声を掛け、一応俺としての意識で話しかける。特に意味はないけど主任に対してはこっちのほうが気が楽だ

「これ、マジだろ?」

「そりやもちろん。さつきまでの撮影とは違ってこれから行くのはマジの戦場。君には俺達に雇われる傭兵に一時的に戻ってもらおう訳だ。それに…」

「…それに?」

主任が一言間を置く。…一体なんだ?

「さつきの話に出てきた死神部隊、多分あいつらが雇われてる。なら、君は奴等に対して良いカウンター役になるでしょう?」

死神部隊!?うそだろ!?その話に思わず俺は思考を固めしまうがすぐに再起動する。まあでも黒い鳥の再来とか言われてるやつが倒せただ。恐らく俺でも倒せるとは思う。けど、強敵であることに変わりはない。

「…主任、確か奴等の隊長は大昔の粒子…コジマ粒子を使った機体があるんだよな?」

「…ああさつきも言ったけど…N—WGIX/V、昔使われたホワイトグリントって機体をイメージして作られた機体だ」

「お前が最終決戦時に乗ってた黒い機体、あれは生み出せないのか?」  
「あー、EXUSIAね。あれは一応データの作成は終わってるけどまだ制作の方はできてないんだよねえ。そもそも俺達のACの在り方自体変わってるからねえ」

「在り方が変わった?」

そこに興味持つよねえと主任が言い、説明を始める。どうやら俺や主任が使用してるACはどれかと言うと今までの物とは違って魔法…じゃないけど、とりあえず現実に存在してるものではないらしい。

通常ACは普通の兵器と同じく、人間の手によって鉄などを加工して作られる、言わば常に現実に存在する制作物。しかし、いま僕達が使ってるACは僕達の機体等のイメージを反映させて創る創造物っていう立ち位置になるらしい。

つまり僕達のACは今、f a t eシリーズで言うところの宝具やD

ies iraeの聖遺物に最も近いもの、になるらしい。つまり：「…僕達はアーチャーにでもなったのかな？」

「そういう訳じゃあないんだけどねえ…ま、ACについてはそれぞれが保有する空想兵器、それこそその宝具みたいなもんだと思ってもらって結構。俺の場合はハングドマンだけではなく、前世で使ったEXUSIAがあるし、君の場合は今まで使ってきた機体のパーツは大體使える。オーバードウエポンを切り替えられたのもその影響ってわけ」

なるほど…とりあえずは理解した。けどそのうえで一つおかしなことが一つある。僕がさっき使ったオーバードウエポン、グラインドブレードについてだ。あれは余りのエネルギー消費量に片腕をパージして無理やりエネルギーを供給する武装になっている。

けど、さっきの戦闘ではそれがなく、両腕がある状態でヒュージキヤノンまで発射できた。あれは一体…

「それと、君のAC、なんでかは分からないけどEXUSIAやN—WGIXVと同じように昔の粒子…コジマ粒子のジェネレーターが追加されてるみたいだねえ。恐らくその影響でオーバードウエポンの連続使用なんて恐ろしい真似ができたんじゃないかなあ」

「は!?!?どういう事だ主任!?!」

僕は驚きの余りつい大声で叫んでしまう。その声でびっくりしたのか皆こつちを見ているけどそんなことは気にしてられない。何故かって世界を荒野に変えた粒子のジェネレーターが俺の機体に装備されてるのか全く理解が出来ない。

「あー、推論でしかないけど聞く?」  
「構わん。話してくれ」

完全に頭が俺に切り替わり、表情が固くなるのがわかる。主任もさつきまではまだおふぎけモードだったが今では最後に会った時と同じような真面目モードになっている。恐らくそれ程重要な話になるのだろう。

「そんじゃあ早速…まず、君が生まれるもつと前の時代、ACが常に空を飛び、海も普通に存在していた時代だ。その時代にはコジマ粒子と

呼ばれる粒子が使われた機体が主力になっていた。そのせいで世界が荒れ果てたのはわかるよね？」

主任の問に無言で首を降る。俺達の居た世界は荒野となった。

「これまた復習になるけどその時代にはホワイトグリンとと呼ばれる機体が存在していた。これ実は二パターン存在していてね、一つはジョシユアと呼ばれていたパイロットが乗っていた言わば初期型。一号機と言ってもいいね。多分このジョシユアが死神部隊のJと思われるんだけど…それとは別で二号機にあたるホワイトグリン、そのパイロットは君かもしれないんだよ、黒い鳥」

「は？…どうということだそれは」

「ホワイトグリンの二号機…パイロットはアナトリアの傭兵って呼ばれてたunk<sup>正</sup>kn<sup>体</sup>ow<sup>不</sup>n<sup>明</sup>の人間でね？その生まれ変わりが黒い<sup>世界を滅ぼした方</sup>鳥なのかもしれないっていうのが俺とキャロリンの推測ってわけ。それなら色々と納得がいくしね」

納得がいく…？それはどういう事だ。一体何についての納得が…疑問に思ったのが表情に出たのか、主任は話を続ける

「君は初めてEXUSIAと戦ったときのこと、覚えてるかなあ？」

「勿論だあんなコジマ粒子を使用した機体…ん？」

「そういうこと。君たちの時代には消え去ったはずのコジマ粒子。その名称を知っていただけでなく君はその動きにすぐに対応してみせた。まるでその動きを知っているかのように」

主任に言われ、ようやく俺も納得した。確かに俺はあるとき直感的にコジマ粒子だと認識したし、動きにも反射的に対応してみせた。普通あの時代のACはあのような動きが出来ないので普通に考えれば対応出来る筈がない。つまり…

「俺が…アナトリアの傭兵…？なら何故俺のACはそのホワイトグリントではないんだ？」

「それは恐らく、黒い鳥としての記憶が強いからだねえ。でも体や魂のどっかにはアナトリアの傭兵としての記憶が刻み込まれてる。ひよっとしたら戦ってる内に思い出すだろうね…アナトリアの傭兵としての記憶が」



俺は思わず頭を抱える。黒い鳥とか呼ばれてるだけでもだいたいぶ頭が痛くなる話なのに：アナトリアの傭兵とまで呼びれていた？流石に冗談がきつい：が、まあいいさ。過去の話だ、スルーしよう。それよりも気になるのはコジマ粒子だ。

「主任、コジマ粒子は世界を汚染し、枯れさせた力だ。そんなのポツクル星で使って問題なのか？」

「それについても問題ないみたいだね。恐らくこれはこの世界でコジマ粒子を使用してるから無害のエネルギーになってるってだけで元の世界で使ってたら当然環境は汚染されるよ」

なるほど：この世界では無害のエネルギー源になっているのか。それなら助かるな。変に環境を気にする必要はないのだから。

「そうか、了解した。記憶が戻るかは知らないしそもそも本当に俺がアナトリアの傭兵だったのかも分からないが：やれる事はやるさ。黒い鳥としてな」

そう言って少し笑う。主任も鳩が豆鉄砲食らったみたいに一瞬固まったがすぐに腹を抱えて笑い出す。やっぱりいつは真面目な方が違和感があるな。いつものように、というのも変な話だが笑ってないとそれはそれで違和感があるからな。

「ハハハ！イイねえ：そこなくっちゃ面白くないじゃない？んじや、おじさんも頑張っちゃいますかねー！」

「お前は少しは自重してくれても良いんだがな…」

俺は正直に言う。もう少し大人しくしてくれ、と：だがまあ敵だと面倒くさいが味方なら心強い。改めて俺はそう認識した。

「あの一、のび太…くん？」

あ、ドラえもん達に色々説明しなきゃ。…大変だなあ…

### 第三話 辿り着いた鳥

「もう間もなくポツクル星に到着します。着陸に備えてください」

ドラえもん達に一つ一つの経緯を説明し終えた俺達はポツクル星に到着するということで気持ちを入れ直していた。ドラえもん達は俺の過去の経歴に驚きを隠せてなかったけどなんとか理解してくれた。

因みにこれが撮影ではなく実戦であることは伝えていない。伝え方がいいかと思っただが伝えない方が変に緊張せずに済むと判断し敢えて言わなかった。

まあ何かあってもACの装甲なら（大体は）防げるから盾になることもできるし主任もいるのだから一先ず問題はないだろう。

それよりも死神部隊だ。どこで仕掛けてくるのかも分からなければ一体どんな戦略で攻めてくるのかもわからない。数で押された場合、俺と主任だけならともかくドラえもん達を守りながら戦うことになればこちらが圧倒的に不利となる。しかし敵もそう簡単にドラえもん達を逃がしてくれるとは思えない。

だから何があっても良いように常に俺の状態にいる。無論戦闘中以外なら僕でいると思うのだがもうすぐ敵陣に着くということで今は俺の状態にいる。主任も先程までいつものふざけた雰囲気であったが今はもうその面影など一切なく、EXUSIAに乗っていた時と同じ真面目モードになっていた。

その俺達二人の雰囲気当てられてなのかは知らないが心無しか撮影だと思いきこんでいるドラえもん達も気を引き締めている。

そして、船がワープ空間を抜けるとモニターに大きな惑星が映っていた。恐らく地球よりもでかく、色はエメラルドグリーンが基本となっている惑星。

「これがポツクル星か…でかいな」

無意識のうちに僕がつぶやく。皆もそれを感じたのか、首を縦に降って頷いていた。正直地球と同じくらいかと思っていた俺達にとってこのサイズは想定外だ。ここどこに宇宙海賊がいるのか分

からなかったら宇宙海賊の企みを阻止できなかつただろう。そもそもアロンくんが来なければここに来る事はなかつたし主任に会うこともなかつたんだが…

「間もなく着陸体制に入りますので、皆さん注意してください」  
言われた通り近くの手すりに捕まって着陸に備える。暫くすると軽い振動が伝わり、エンジン音が消える。どうやら問題なく着陸は出来たようだ。

俺はアロンが宇宙船の扉を開けると同時に撮影時にも使用したバトルライフル二丁とACを展開し、即座に飛び出る。今回のアセンは重量二脚の重装甲型。ある程度装甲値を上げ、敵がレーザーメインと言うこともあるのでTE装甲をメインに上げている。なお主任もハンゴドマンを展開してはいる為、この2機なら基本TE攻撃からは身を守れるが死神部隊のアセンが現状ではわからない以上、もし遭遇すれば逃げる必要がある。

最悪戦闘中にアセンブルを変えればいいのだがそう簡単に変えられる物ではない。システムを展開し、パーツをセットし、戦闘モードを再起動する。言葉にすれば簡単なのだがそれを行うには一度ACを仕舞わなければならない。

そういう意味ではロザリィと行動していた時の方が安全ではあった。時間は今より掛かるもののへりの中ということもあり、余程の攻撃でなければそう簡単にやられる必要がない。しかし武器だけは戦闘中でも多少のラグはあるし動きが止まることにはなるが交換できるのがあるがたい部分だろう。しかしそれでも今まで通りハンガーにある程度武装を設定して切り替えたほうが楽ではあるのだが。

だが無い物ねだりは仕方ない。一応主任と話し合い、もしアセンブルを変えることになればその間主任には全力で僕を守ってもらうことになる。

また、今回は長期決戦が予想されるので今の所オーバードウエポン<sup>規格外武装</sup>は装備しておらず、ライトハンガーにブレード、レフトハンガーにレーザーライフルを装備している。扱いやすい武装を装備しておいて備えようという事でバランスはあまり考えていない。

《システム、スキャンモード》

飛び出すと同時にリコンを一気にバラまき、システムをスキャンモードへと変える。幸いな事に僕達以外に生体反応とかはなく、近くに敵がいる様子も見られない。俺は一息つくくとバトルライフル一丁を右手に残し、他は解除した。

主任も俺の様子を確認するとK A R A S A W Aと呼ばれるレーザーライフルを手に残り、他を解除した。

周囲を見ると遊園地の遊具と思われる物がいくつも見える。恐らく実際にこういった物を作ることでの惑星の住人に自分達を信じ込ませていたのだろう。

しかし、奴らの目的はともかくどうやってあんなでかいダイヤモンドの太陽を壊す気だ？ エネルギーを利用するとは聞いていたがどのように利用して壊すのかまではアロンも知らないようだった。

恐らく砲撃をするつもりなのだが一体どうやって…

そんな事を考察していると急に電気が付き、周りが明るくなる。遊具らしきものも起動し、夜の遊園地は稼働を始めた。どうやら周囲を確認しに行っていたスネ夫が付けたようだが…危ないな、色々。

まあ仕方ないか。俺も前世の記憶が無かったらそんな風に動くだろうし…

「さて、まずは情報戦と行くか」

『その必要はありません。既にこちらで情報収集と目的をある程度は集めていますから』

「うわっしよい!?!」

突然脳に声が響き思わず変な声が出る。周りを見るが誰もいない。あれ、ドラえもん達遊具で遊び始めちゃったよ…大丈夫かこれ…

それはともかく、突然で驚いたがこの声には聞き覚えがある。横にいる主任と同じく前の世界での俺の敵にして一度はオペレーターとして組んでもらった女。

『キャロル・ドーリー…か』

『ええ、その通りです。お久しぶりですね』

俺としてはあんまりいい思い出がないこの女だがこいつも主任と

同じく意味のないことはしない。寧ろ主任よりしつかりしてる分指示を聞くならこつちのが百倍近くマシだろう。

『それよりも、この様にテレパシーに近いものを使用しているにも関わらずよくすぐに使い方が分かりましたね』

『あー…ドラえもののひみつ道具に似たようなのがあるから同じようにやっているだけだ』

なるほど、とキャロルは眩き、思考を始める。恐らく彼女や主任にとってドラえもん、まして22世紀の技術なんて珍しいにも程があるのだろう。少し経ってキャロルは失礼しましたと返事してきた。さて、ここからが本題…か

『まず現状についてお話致します。現在敵と思われる宇宙海賊はダイヤの太陽を破壊する為の塔の建設を、その塔の警備を雇われた死神部隊に行わせているようです。また、未確認のAC二機も確認されています』

「未確認？それは一体…」

『そのうちの二機は死神部隊の機体の一つであることは分かっているのですが…どうやら死神部隊とは敵対しているようです。もう一機に関してはデータ上の推測でしかありませんが恐らく貴方の、黒い鳥の再来と呼ばれている人物であると思われれます』

「…まじか」

キャロルの報告に驚きが隠せず思わず声を漏らす。映像でしか見えないがあれだけの實力を持ったパイロットがこの星に居る。更に死神部隊と敵対していると言う事はうまく行けばこちらと合流できると言う事だ。もし可能ならば合流し、死神部隊と宇宙海賊を叩き潰したいとこだ。そういやようやく敵がどうやって太陽を破壊するのか分かったわけだが…

「先程太陽を破壊する為に塔を建築している、と言っていたがどういう事だ？」

キャロルはああ、なんだそのことですかと言うと説明を始める。いや、なんだって俺は全く分からないからな？

『簡単に言えば星の生命エネルギーを使用しオーバードウエポンを使

用すると言った具合です』

「それなんてカ・ディングル？」

ようはシンフォギア一期でフィーネがやろうとした事と一緒に。ってそれあの塔を壊せということになるわけだがどうするか…

『まあそんなに気にすることも無いと思うよ？まだエネルギーの充填まで時間はあるしね。それに死神部隊だけでなく宇宙海賊の幹部みたいのもいるみたいだし』

「おい待てそんな聞いてないぞ」

待てなんだその新情報。死神部隊だけでもだいぶ面倒くさいのにそんなやつらも居るのか。何度目になるか分からないが再び頭を抱える。主任が後付でACはないから殆ど敵ではないと付け加えるがそれはあくまで俺らの話であってドラえもん達には危険だ。流石にまずいぞこれは…

「おーいーのび太ーのび太もこっこいよー！」

ジャイアンの声が聞こえ、そちらに視線を向ける。どうやらだいぶ楽しんでるようでヒーロースーツのままこちらに手を振っている。記憶が戻る前の俺だったら多分ついて行っているが今の俺にとつてここは戦場。それに、さっきから感じるこの予感。何かが増えていつている感覚。しかし殺気の様なものや人の気配は感じない。なんだこれ。

「ちよつとおこれまずいんじゃないのお？」

「…ああ、これはまずい。囲まれているな…」

思わず舌打ちをしてACを戦闘モードで起動しておく。主任もハングドマンを起動し臨戦態勢を整える。すると警備服の様なものを着たロボットのようなもの一人の女性がやってきた。女性、それも地球人そのものだ。あの女…雰囲気は妙だな

「ごめんなさい！勝手に遊んじやって…」

スネ夫は警備の人がやって来たと思いい謝りながら警備員達に近づいていく。もしキャロルの話、そしてアロンの話から推測できた事が正しいなら…スネ夫が危ない！

「スネ夫（さん）！そいつらは警備員じゃない！」

「へっ?」

俺とアロンが同時に叫ぶのと共にスネ夫の元まで一気に加速しスネ夫を回収、再びブースターを吹かし後退する。それと同時に銃声が響き、スネ夫が居た位置に見事な円形が出来上がる。さしずめグラハムスペシャルならぬのび太スペシャルとでも言ったところか。なんかダサイな…

スネ夫が腕元でグエッと小さく呻くがこれは仕方ない。もし回収していなければスネ夫は消し炭になっていたのだから。

俺はスラスターを吹かしながら着地し、お返しに鉛弾（当たれば爆発する）を撃ち込んでやる。しかし、女はそれをローリングで避け、平然とした顔で立ち上がる。少しくらい表情崩れくれてもいいだろ…とりあえずスネ夫をドラえもんに投げ渡し、軽口を叩く。

「もう少し表情豊かな方がいいと思うぞ? 顔はいいんだしな」

「そうか、初代黒い鳥の言葉だ。頭には入れておこう。ところで、お前は私を楽しませてくれるな?」

女がそう言うのと女の胸元辺りからぶら下がっていたドッグタグを中心に装甲が展開され、徐々にその姿をACへと変えていく。なんだそのアメリカ映画みたいな展開の仕方トランスフォーマーかお前は。現れたのは逆関節の狙撃特化と思われる赤と黒を基本としたカラーリングの機体、やはり間違いなかったか…

「死神部隊…仕掛けてくるのが早いな」

「ふっ…お前と戦える事を待ち望んでいたからな。候補者ではない、真正正銘の黒い鳥。人の中の可能性」

こんな序盤から死神部隊と交戦するとは思っていなかった。来てももう少しあとだろうと考えていたから正直予定外過ぎる。でも、あいつの性格はなんとなく読めた。言葉からして恐らく、昔の武人の様な性格であるはず。なら!

「そうか、ならここで倒させてもらおう!」

「見せてもらおう、お前の持つ力。このKに届くといいな!」

俺はそのまま左腕のバトルライフルを撃ちながら右腕のバトルライフルをハンガーのブレードと入れ替え、接近戦の準備を整える。相

手は攻撃を避けながらこちらを狙撃してくるが俺はそれをギリギリのタイミングまで引き付けてから回避する。敵がTEメインとは聞いていたが向こうのACはどう見てもKEメインの機体。当たらなければいいのだが向こうの狙撃技術はかなり高い。

「ちっ！アセンブルを確実に間違えてきたなクソ！」

「よく言うな黒い鳥。狙撃を避けながらこちらに近づきつつも自身や味方に弾が当たりそうになればバトルライフルでそれを撃ち落とすなど、完全に異常だ」

「昔から射的は得意でな！」

無駄口を叩いてはいるが正直ギリギリだ。だが、こちらに意識が向いているのはありがたい。このままこいつを引き離す！

「はっ！こつちだよノロマ！」

「ちっ、流石にやるな…だが！」

向こうは誘いに乗ってこつちを追いかけてくる。このまま距離を引き離せば！

「主任！こつちはこのまま引き受ける！そちらはうまい具合に脱出してくれ！合流地点は逃げきってからこちらに送ってくれ！」

主任に通信を送りスラスターを吹かす。主任からは了解と短いコメントのみが来たがまあやってのけてくれるだろう。あとはこつちが上手く奴を仕留めるか、もしくは足止めして振り切るかの二択だ。

俺は辺りが不自然に枯れている森を見つけると視線を逸らさないように注意しながら着地する。

向こうもここでやり会う意図を汲んだのか正面に着地し、こちらを見据えていた。

「なるほど…あの者たちが居れば本気は出せないということ…か」

「そういうことだ。こつちとしてはなんとしてもあの場から引き離す必要があつた訳だが…まさか乗ってくるとはな」

「ふっ、全力を出せない相手と闘っても意味がないということだ。最初に言ったただろう黒い鳥。私は見たいのだ。黒い鳥と呼ばれる者の…オ리지ナルの力をな」

なるほど…完全な戦闘狂だなこれは…俺とKは静かに、互いの動き



を見ながら仕掛けるタイミングを見極める。こつからの動き方次第で戦況はいくらでも変わる。まるで西部劇のガンマンだな。

どうでもいい事を端で考えながらジツとタイミングを待つ。

「そろそろ仕掛けてくれてもいいんだぜ？」

「無理に動けばこちらがやられる、それくらい分かっているさ。そちらもそれを分かっているか？動かないのだろうか？」

そりゃ読まれているか…：しかしいつまでたつても動かないのであれば時間は稼げるだろうが場は動かない。

こちらから仕掛けるか…：そう思いライフルを握り直した俺だが突如コックピット内に警告音が響いた。

「ちっなんだー！」

「この反応は…まさか！」

何事かと思いレーダーを確認すると未確認の反応が2機。どうやら向こうはこの反応について何か知っているみたいだが…

警戒していると空中から大量の弾幕が雨のようにKの機体に向けて降り注ぐKはそれをバックブーストでそれを躲し再び地面に着陸する。それと同時に二機のACがこちらの後ろに着陸し、銃口をKに向けた。

一機はKの色違いとも見れる機体、ただし脚部などのカスタマイズは多いに違うがどこか似た雰囲気を出している。

もう一機の機体は俺と同じようなアセンブルに俺と同じカラーリング、そして何より目立つのが肩の黒い鳥のエンブレム。

それを見た俺は先程キャロルから聞いた話を思い出した。黒い鳥の再来と反乱を起こした死神部隊の機体の話を。

「こちらリィナ・B・リュミエールです。そちらのAC、大丈夫でしょうか？」

黒い鳥の再来と思われるパイロットから通信が入る。まさか本当に女だったとは…

「こちらレイアーク・デイル・シュヴァイツェン。AC名ダークレイブんだ。こちらはなんとか問題ないんだが…まさかお前が黒い鳥の再来か？」

お礼の通信も兼ねて確認を取る。こつちとしては助かったがそれを確認しとかないとな…

「貴方がオリジナルの黒い鳥…情報が正しかったと？」

もう一機の黒と青のACからも通信が入る。こちら声も女性だ。しかし…情報？

「ああ、俺がそのオリジナルとやらになるらしいが…情報とは？」

「ええ、私達が死神部隊から逃げてる最中に通信が来たのよ、オリジナルの黒い鳥が死神部隊と交戦しているから援護をしてくれとね。私達も半信半疑だったけどいざ来てみれば本当にAC同士が戦闘をしている。だからそちらの援護をしたのよ」

情報…恐らくだがキャロルが送ったのだろう…しかしこの状況では助かる。早くこいつをどうにかしてみんなと合流しなくてはならないからな

「そういう事か…恐らくその情報を流したのはこちらのオペレーター…になるのか？まあそいつが送ったのだからそれについては信用してくれていい。このまま援護を頼みたいのだが…リュミエールとあと…名前は？」

オペレーターについて疑問形なのは仕方ない。まだその辺の立場とかの話は向こうともしてないんだからな。それでついでに名前も聞いておく。リュミエールについては先程向こうから名乗っていたがもう片方は聞いていなかったからな

「ごめんなさい、まだ名乗っていなかったわね。私の名前はマグノリア・カーチス。貴方の最初の雇い主であるフランシス・バッティ・カーチスの子孫よ。それと援護については了解。私達に取っても死神部隊は倒すべき敵になるもの」

「…色々とツッコみたいんだけどそれは置いておこうか…そうか…フランの…ってことはまさか俺の…いやそれについては後で…とにかく、礼を言う、カーチス、リュミエール」

やっばい…一瞬のび太としての部分も出てきたレベルでまずい、まさかのフランの子孫って…ひよつとしたらあるとき…つてか変な事

言ったせいでカーチスの回線から俺のってどういう事だろうって考えてるであろう独り言が聞こえてきてるし…

…まあこれについては後で考えよう。わざとらしくゴホンと言い区切りをつける。カーチスもそれが聞こえたのか独り言を辞めていた。

「すまないな、待たせてしまった」

「いいや、構わん。不意打ちを付くような真似をするつもりはない。話を纏めるのは大事だからな」

ここまで通信をしていたにも関わらず邪魔をしてこなかったKに謝罪を入れ改めて向こうと向き合う向こうは3V S 1でもやるつもりなのか？そう思っていたが向こうがそれに、と付け加えてくる。

「そちらが合流するのも視野に入れていな、こちらとしてはやはりフェアで闘いたいと思っていたのでそちらが話を纏めているうちに準備していた物を展開させて貰った」

そう言う空から二機のACが出現し、Kの機体の両サイドに並ぶ。恐らく無人機だろうが…これで3V S 3か

「そうか…ならこれで仕切り直した。リュミエール、カーチス、こちらに続いてくれ」

「了解！」

二人に指示を出し、スラスタを吹かす。向こうもこちらの動きを確認し二機の無人機をこちらに向かわせ、K自身は空へと飛び上がった。

「さあ、続きを始めようか！黒い鳥！」

Kの言葉が引き金になり、銃声が響き始めた